

修士論文（要旨）

2019年1月

知的な遅れのない発達障害児をもつ母親の養育レジリエンスについての質的研究

指導 池田 美樹 先生

心理学研究科
臨床心理学専攻

217J4004

小田 芳子

Master's Thesis (Abstract)
January 2019

A Qualitative Study of the Parenting Resilience of Mothers of Children with Developmental
Disabilities Who Are Not Intellectually Impaired

Yoshiko Oda
217J4004
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Miki Ikeda

目次

第1章 序論	1
1-1. はじめに	1
1-2. 先行研究	1
第2章 目的と研究意義	6
2-1. 目的	6
2-2. 研究意義	6
第3章 方法	7
3-1. 予備調査	7
3-2. インタビュー調査	8
3-3. インタビュー調査の分析	10
第4章 結果	12
4-1. 分析結果	12
4-2. カテゴリーの説明	12
4-3. 結果図とストーリーライン	15
第5章 考察	18
5-1. カテゴリーごとの考察	18
5-2. 全体の考察とまとめ	25
5-3. 本研究の限界と今後の課題	28

謝辞

引用文献

資料

第1章 研究背景

現代の子育てを取り巻く環境は、養育者の孤立感や疲労感、負担感や不安感を増大させ、メンタルヘルスの問題を引き起こす要因の一つとなっている（内閣府，2013）。子育て場面では、親は日常的な出来事に対応し続ける慢性的なストレスや、子どもの成長過程で直面する出来事によるストレスを体験すると報告されている（尾野，2013）。定型発達児と比べ、障害児の子育てには、特有の困難さがあると考えられ（中野，1993），中でも、知的な遅れのない発達障害は、障害の見えにくさから周囲の理解や援助を受けにくいいため、親は困難感や不安感を抱きやすく、ストレスフルな状況にあると指摘されている（中田，2002；山根，2012）。

近年、困難な状況を乗り越える精神的回復力として、レジリエンスという概念が注目されている。レジリエンスは、個人の日常生活場面でのストレスフルな状況でも用いられる力と考えられることから、子育て場面にも適用することの重要性が述べられている（尾野，2013）。親が養育上の困難な状況への対処を通じ適応する過程・結果・能力としてのレジリエンスの検討は、支援者が援助介入を考える上で重要であると考えられる。そのため、本研究では子育て場面の中で特に高いストレス状況にあると予測される、知的な遅れのない発達障害児の母親のレジリエンスについて取り上げる。養育レジリエンスを、鈴木他（2015）を参考に「養育困難があるにも関わらず、良好に適応するための能力、およびその獲得に至るまでの動的過程」と定義し、養育上の困難を乗り越え、精神的に回復する動的過程としてのレジリエンスについて環境要因や個人要因との関連性から検討する。

第2章 目的

知的な遅れのない発達障害児をもつ母親の養育レジリエンスを、子どもの障害に関連する問題の対処および捉え方に着目しながら明らかにすることを目的とする。

第3章 方法

予備調査では、首都圏内の発達障害児・者の当事者・家族の自助グループに所属する、16歳以上の知的な遅れのない発達障害者を持つ母親45名を対象にアンケート調査を行った。

アンケート用紙は、フェイスシートと Suzuki et al. (2015) の養育レジリエンス要素質問票（以下 PREQ）、対象児の適用基準により構成される。PREQ の得点が高いことは養育レジリエンスの要素を持つ程度がより高いことを意味することから、合計点が82点以上の者をインタビュー対象者とした結果、9名を対象とした。インタビューは1名に対し2時間程度の半構造化面接を実施した。

分析は、木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた。分析テーマは「知的な遅れのない発達障害児を持つ母親が養育を行う中で、養育上の困難や問題への対処を通じて、養育レジリエンスを獲得していくまでのプロセス」とし、分析焦点者は「養育レジリエンスを獲得したと判断される16歳以上の知的な遅れのない発達障害者をもつ母親」とした。その結果、分析対象者は8名となった。

第4章 結果

M-GTA による分析の結果、37個の概念、12個のカテゴリー、4個のカテゴリーグループが生成された。カテゴリー間の関係を検討して作成したストーリーラインは以下の通りである。< >はカテゴリーグループ、【 】はカテゴリー、下線部は概念を表す。

母親は育児過程で、子の周りの環境への適応希求や【子の問題の顕在化】から、「普通」と異なる性質を問題視して克服を試み、困難感が持続する＜特性問題視による育児困難持続スパイラル＞に陥り、自責感や孤独感、子の将来への不安を感じていた。対応困難感が増すことで、母親は＜援助希求行動からの発達障害への気づき＞に至る。援助希求の結果、母親は【専門機関・関係機関への不信感】あるいは【理解者からの支えによる安心感】を得ていた。前者の場合、再び適切な相談場所を求め【問題に関する知識の収集・蓄積】に向かう。後者の場合、専門家、母親仲間、家族等の理解者の受容と助言に支えられ、問題に関する知識収集・蓄積を行い、子の【対応の振り返り・意識の変容】がなされる＜サポートの活用を通じた変容＞へと向かう。＜サポートの活用を通じた変容＞を通して母親は、子の状態理解に基づく、【子の視点に立った対応】を試行錯誤しながら行う＜子の視点に立った対応の変化＞へと向かった。理解者からの受容から促される、母親の自己受容と子の受容は【親子の境界線認識】を促進し、【子の視点に立った対応】を支える。試行錯誤の過程で、母親は【子の良好な変化の現れ】により、対応への自信をつけ、【子に対する理解の深まり】へと至る。その結果、母親は障害特性を含め子の個性を受容し、【子の成長への信頼】を持つ。その後も母親は＜サポートの活用を通じた変容＞と＜子の視点に立った対応による変化＞の循環の中で、子への対応を続けていた。

第5章 考察

本研究からは、知的な遅れのない発達障害児をもつ母親が、育児過程の中で、専門家や関係者、家族との社会的相互作用による影響を受けながら、養育レジリエンスを獲得する動的過程を以下のように明らかにすることができた。

母親は子の「普通」と異なる性質を問題視して克服する試みから、対応困難感、問題の維持悪化のダメージを繰り返す「特性問題視による育児困難持続スパイラル」に陥っていた。母親は障害認識の困難さから、育児困難に対する自責感や周囲の理解の得られにくさによる孤独感を感じていた。子の性質の問題視は、周囲の子との比較や学校からの指摘等の社会環境による要因と、子の症状的な異変の現れが影響をもたらし、発達障害の発見の時期にも影響する。

子への対応困難感が増すことで、母親は、母子の問題の一体感を持ちながら、関係者や専門家に援助希求行動を出す。相談過程で、子の発達障害への気づきから母親は具体的な対応模索へと向かう。

母親は理解者からの受容と助言に支えられ、問題知識の収集・蓄積をし、対応の振り返り・意識の変容をする試行錯誤の中で、子の状態・特徴理解に基づいて子が自分のペースで行うよう援助する「子の視点に立った対応」を行う。この対応は親子の問題を区別し、子を尊重して自己解決を見守る「親子の境界線認識」が支える。子の良好な変化の現れと、本人視点の特性理解の深まりが、母親の、子の成長を信頼する養育レジリエンス獲得につながる。

以上のことから、知的な遅れのない発達障害児をもつ母親への支援の在り方として、(a) 母子の困難を子の障害特性によるものとして理解し受容すること、(b) 子の視点・体験に沿った障害特性の理解を促すこと、(c) 子が自己解決できるよう配慮・援助する有効性を伝え、具体的対応を示すこと、が重要であると考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association 著 高橋 三郎・大野 裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 木下 康二 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 内閣府 (2013). 平成 25 年度版子ども・若者白書
- 中野 孝子 (1993). 家族ストレスに関する基礎的研究——心身障害児をもつ親のストレス—— 関西学院大学教育学科研究年報, 19, 69-84.
- 中田 洋二郎 (2002). 子どもの障害をどう受容するか——家族支援と援助者の役割—— 大月書店
- 尾野 明未 (2013). 母親の子育てレジリエンスに関する研究——子育てレジリエンス尺度の作成及び子育て支援プログラムの適用を通して—— 桜美林大学大学院博士論文 (未刊行)
- 鈴木 浩太・小林 朋佳・森山 花鈴・加我 牧子・平谷 美智夫・渡部 京太・山下 祐史朗・林 隆・稲垣 真澄 (2015). 自閉症スペクトラム児 (者) をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究 脳と発達, 47 (4), 283-288.
- Suzuki, K., Kobayashi, T., Moriyama, K., Kaga, M., Hiratani, M., Watanabe, K., Yamashita, Y. & Inagaki, M. (2015). Development and Evaluation of a Parenting Resilience Elements Questionnaire (PREQ) Measuring Resiliency in Rearing Children with Developmental Disorders. *PLOS ONE*, 10(12), e0146090.
- 山根 隆宏 (2012). 高機能広範性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ：人生への意味づけと障害の捉え方の関連 発達心理学研究, 23 (2), 147-157.